

パネルディスカッション あの時の経験とこれからの備え

【登壇者のご紹介】

<語り部>

	<p>島倉 与志貴 (しまくら よしき) さん 入善町在住。 高波災害当時は、芦崎地区の区長会長として地域住民の意見取りまとめや行政との橋渡し役として対応。被災地区代表として災害対策本部と調整を実施し、早期復旧にあたる。</p>		<p>新酒 善彦 (しんさか よしひこ) さん 黒部市在住。 黒部市消防団生地分団 副団長。 高波災害当時は、生地分団班長として浸水を受けた生地での巡視や土嚢積みなどの応急対応にあたる。現在も生地分団副団長として、水防活動等に携わる。</p>
	<p>大井 光男 (おおい みつお) さん 朝日町在住。 高波災害当時は、入善町建設協会理事として、被害を受けた芦崎地区での応急対応にあたる。資機材の手配や救援物資の受け入れ等、応急対応の窓口として陣頭指揮をとる。</p>		<p>神子沢 喜彦 (みこざわ よしひこ) さん 入善町参事。 高波災害当時は、入善町総務課の防災担当係長として、芦崎の現地対策本部で復旧のための対応にあたる。現在も町の防災業務などに携わる。</p>

<コーディネーター>

	<p>福濱 方哉 (ふくはま まさや) 国土交通省北陸地方整備局富山河川国道事務所長。 高波災害当時は、国土交通省国土技術政策総合研究所海岸研究室長。 高波災害対策検討委員会の委員として、平成 20 年 3 月まで復旧等に向けた各種検討に従事。平成 20 年 4 月から平成 23 年 6 月まで黒部河川事務所長として、現場において復旧に向けた平成 20 年高波災害対策事業に携わる。</p>
---	---

<コメンテーター>

	<p>川口 歳則 (かわぐり としのり) 富山県富山土木センター立山土木事務所所長代理。 平成 20 年 3 月から半年間入善町に出向し、高波災害で甚大な被害を受けた入善漁港海岸施設の復旧事業に携わる。</p>		<p>古本 一司 (ふるもと かずし) 国土交通省北陸地方整備局黒部河川事務所長。 平成 29 年 4 月より現職。下新川海岸の保全整備を担う。</p>
---	--	---	---

※所属名は平成 30 年 11 月現在のもの

1. あの時の経験

(福濱コーディネーター)

それでは平成 20 年高波災害当時それぞれの立場で対応された方々から、当時のことについてお話を伺いたいと思います。

まずは島倉さん。当時入善町芦崎地区のまとめ役として、地区を代表し行政との調整をされたと伺っております。早朝からの波の様子や集落に波が入ってきたときなども目の当たりにされたかと思いますが、当時のことについてお話をお願いします。

(島倉さん)

冬は波の音が大きいのですが、前日夜は普段と変わらない様子でした。朝 5 時頃に海岸近くの方から電話をもらい、慌てて海岸に行くときすごい波でした。海岸への車の出入りに線路の枕木のようなものが何段も積み重なっているところが 2 箇所あるのですが、1 箇所は飛ばされていたので、2 人で積みました。作業が終わり、次の箇所へ行くとまた同じ様になっており、これはもう人間の力ではどうしようもないと思いました。



日曜日の朝でまだ暗い中、消防団に海岸近くに車を停めている人たちへ「車を避難させてください」と地区内を消防車でアナウンスして回ってもらいましたが、その最中にも波が上がったり自転車が流されて来たりしました。日曜日なのでみんなゆっくりしており、海岸近くに停めてあるほとんどの車は大変な被害に遭ったことを覚えております。

寄り回り波は続けて来るのではなく、大きな波が 1 度来ると次の波が来るまで短くて 2~3 分の間、長くて 10~15 分くらいの間があります。地区の人たちは心配のあまり、波が来ない間に（海岸へ）波を見に行き大きな波が来たら逃げる、を繰り返していました。私も倉庫の後片付けをしたり、波除けの砂袋を積んだりしていましたが、段々と人の手には負えなくなってきました。



お昼近くなり、今まで経験をしたことがない屋根越しに大きな波が見えるようになり、とても恐怖を感じました。私は 50 年前の高波も経験しておりますが、その経験の足元には及ばないくらい大きな波でした。地区の中を巡回しながら被害にあわれた方や怪我をされた方に「逃げろ」と声をかけました。「どこに逃げたらいいのか」という声もありましたが、とにかく「逃げろ」と。ちょうど地区では下水道工事の最中だったので、マンホールの大きな穴が開いており 1・2 度胸まで水に浸かった記憶もあります。

(入善町に) 災害対策本部が設けられることになり、最初は地区の西にある公民館に本部を設置した

が、そこも浸水の恐れがあるため、南にある保育所に移設されました。本部で町の対策を聞いたり町の中を回ったり、自分なりに動いたことを思い出します。

夕方 16 時ごろに一番大きな波が来まして、結構な長さがある防潮堤がすごい勢いで飛ばされました。私も海岸近くで見ていたのですが、その大きな波は山が動いたかのような感じでした。（住民の）皆さんは離岸堤に波がぶつかる場所まで見ていました。危険なのですが、離岸堤まで来てはじめて波の大きさがわかるのです。私も公園のトイレの山側の陰に隠れて逃げました。大きな波が来たあとは少しずつ穏やかになっていき、その日の 18 時か 19 時ごろには（警報が）解除になりました。



消防車がつぶれているのがわかりますか。これは午前 10 時半頃ですね。消防隊員も何名か流され、命からがら助かったと聞いています。



海岸から 300 メートルほど離れている地区の南側の田んぼです。北側であふれた波が南側の田んぼに流れ込み、地区から出入りができない状態でした。先ほどの青木さんの体験にもあったとおり、彼の家の周りもすごい濁流で人はまず歩けません。水が引いてから公民館に行き、町の人たちと会話しやっと我に帰ったような気がしました。



（福濱コーディネーター）

どうもありがとうございました。朝起きたときに大きな波が来ていたかと思いますが、現場を見られて最初にどんな風に思いましたか。

（島倉さん）

いつもよりは大きいかなと思いましたが、年に一回くらい海水が堤防を越えることはあるのでそこまで驚かなかつたです。ちょっと大きいかなと思ったくらいです。

(福濱コーディネーター)

どうも、ありがとうございました。

続きまして新酒さん、当時黒部市消防団生地分団の班長として、浸水を受けた生地地区で波が入ってくる中で土嚢積みや巡視などの水防活動にあたったとのことですが、当時のことについてお話をお願いします。

(新酒さん)

当時私が勤めていた会社は生地鼻先灯台の近くの海岸線沿いがありました。分団長から「お前の会社が大変なことになっている」と電話があったのですが、あまり、ピンときませんでした。

消防団の他のメンバーと消防車で会社の近くまで来ると、いつもと様子が違うことに気づきました。朝7時半から8時頃でしたが、この辺り一帯に大きな石がごろごろ転がっていました。消防団としてどう対処すればいいのか、本部も立ち上がっていなかったため、とりあえずこの周辺を巡視し、どういう被害状況かを確認をしました。

その後しばらくして、本部が立ち上がり土嚢積みをするようになりました。土嚢を積むまで1時間ほど間が空きましたが、その間に会社の被害状況の確認などもしていました。土嚢積みをはじめましたが、最初はこんなもので役に立つのかなと疑問に思っていたのですが、積み重ねていくうちに水がせき止められ山手側に浸水せずに済みました。



同時に共和土木さんにトンバックという大型土嚢を積んでもらい少しホッとしました。土嚢一段だけでは（波の力で）多少動いたのでこれで大丈夫なのかな？もっと積んだほうがよいのではないかという声もありましたが、積み上げていくと安定し波を抑えることができました。継続して波が続くわけではないので、作業の合間に海の様子を見に行ったりと少し余裕が出てきました。



平成20年2月24日 12:00頃



⑥-1

昭和45年頃の生地鼻



昭和45年2月 台湾坊主により高波来襲

⑥-2

高波による越波
(入善町芦崎地区)

家屋等の被害
(黒部市生地地区)

昔、会社はもっと波打ち際にあり、50年前の高波で被害を受け（今の場所に）移動したと聞きました。私は被害を受けた苦い経験を聞かされてきたので、（高波災害は）周期的に来るのかなとかいろんなこと考えながら、会社の作業や消防団の活動をしていました。土嚢積みは結果的には効果があったと個人的には感じており、消防団として地域住民の安心・安全、そして生命財産を守るという使命を果たせたのかなと思いました。

（福濱コーディネーター）

どうもありがとうございました。水害時には、地域の皆さんでできる水防活動が重要であり、結果的に被害を食い止めたとのことでした。

続きまして大井さん。当時入善町建設協会理事として、応急対応のための資機材調達などにあたったと伺っております。苦労などもたくさんあったかと思いますが、当時のことについてお話をお願いします。

（大井さん）

私は朝日町に住んでおり、災害時は家で穏やかに過ごしていました。そこに「現場が大変なことになっている、早く来てくれと」一報が入りました。護岸工事の現場に着き、一瞬にして手の打ちどころがない、どうなっているのだろうと思いました。自然災害の猛威、私たちではどうにもならない力があつたのだなと第一印象を感じました。



平成20年2月25日 10:50

町の方は家が傾いたり道路がなくなったり、下水道工事で掘削したところが土砂で埋まってどこかわからないという状況の中、建設協会の会長から、なんとか協会で応急処置をできないかという依頼がありました。

24日の夜に災害本部が立ち上がり、動き出したのは夜22時でした。日曜日だったためお酒を飲んでおられる方や、月曜日の現場の段取りを済ませた方もいましたが、ダンプ10台、バックホウ5台を確保するために声かけを行いました。高波災害があったことを知らない方もおり連絡がつかない会社もありました。とある会社へは夜23時に家のドアをたたいて、「ちょっと大変なことになった、協力をしてくれ」とお願いしにも行きました。各社それぞれの現場を持っており、その日の仕事を止めて、人間を派遣することはとても大変なことです。災害を見て協力しようとみなさんに集まってもらい対応に入ることができました。

トンパックを積んでいる様子です。11tあるブロックで（島倉さんの経験談にあった）門扉が飛んでいたところを塞ぎました。二次災害を防ぐため、とにかく開口部を塞ごうというのがこの時の対応です。協会ではブロックを調達できなかったため、国交省に協力を得たことを覚えております。



これは神通川のブロックを供給してもらい（対応箇所）対岸をトラックが通っている様子です。（今でこそ笑い話だが）このときも慌てていたので、ブロックを落として道路に穴が開いたこともありました。



災害現場の様子です。バックホウが、地元の方や消防団員もそれぞれが作業している現場です。この時に一番気にしたのは人との接触が一番危ないため、一生懸命避けて作業しました。バックホウの前に人がいたり、業界内では当たり前なことでもなかなか（地元の方との）意思疎通を取ることは難しかった。朝礼の時に私は、「この仕事はみんなのためにやることなので、荒い声は出さず、くれぐれも人との接触は避けてくれ。」と話をしました。みなさんの協力のもといち早く復旧できたと思います。



ちょうどこの時期に被災した地区で下水道工事をやっていた。掘削した（マンホールになる）ところに土砂が埋まり、穴をあけたところにも水がつき（島倉さんの体験談にあったように）人が落ちることもある。これを復旧するのに大変な時間がかかりました。バキュームや人海戦術、みなさんのおかげでうまくいきました。トイレが使えないという状況下でもあり、仮設トイレを一晩に十数機用意しました。夜にトイレへ行くためにライトをつけてくれと要望があり、ライトが明るすぎると言われることもありました。この下水道には難儀をしたことを覚えています。



これは土砂が片付いた後のごみの様子です。畳や金庫など色々なものがありました。これはごみ置き場の一部分の写真で、他にもいくつかごみ置き場があった。海水に浸かってしまったため臭いもあり、カラスも寄ってきました。ごみに網をかけてくれとの要望もあったが一部分しかかけられず、すべて片づいたのは5月末でした。国交省と役場と協力して対応しました。



これは支援物資です。災害になると、いろんなところから支援物資が来ますが、災害本部に想定以上の支援物資が届き対応ができなかった。本部だけではなく他の場所に分けるなどしなければせっかくの支援物資が無駄になってしまいます。私の災害対応の経験は以上です。



平成20年2月25日 13:07

（福濱コーディネーター）

災害の慌しいなか大変ご苦労されたと思います。ありがとうございました。
続きまして、神子沢さん。当時入善町の総務課の防災担当として現地対策本部の運営などをされたとのことですが、対策本部立ち上げなどいかがでしたでしょうか、お話をお願いします。

(神子沢さん)

高波災害当時は、全国的に相次ぐ災害を受け、総務課に「防災」という名のついた係が設置されて3年、私が防災を担当して2年目の年でありました。

高波災害の対応については、お手元に平成23年2月に作成した災害記録誌に掲載したものをお配りさせていただきましたので、のちほどお読みいただければと思います。

本日は、高波災害の前年に行った災害対策本部図上シミュレーション訓練で本当によかったと思う点についてお話をさせていただきます。

消防庁の指導で行った災害対策本部図上シミュレーション訓練は、文字通り災害対策本部を運営するための訓練であり、町長、副町長、教育長をはじめ各課長、係長など合わせて34人がプレイヤーとして参加しました。私は担当係として訓練の進行役であるコントローラーとして参加いたしました。



オリエンテーションの後、付与カード（状況付与票）あるいは、プロジェクター、電話、FAXを使い次々と被害の状況を付与していきます。

それを各部で整理して共有しながら、災害対策本部員会議で意思決定をしていくという訓練です。



大変早いペースで多くの状況が付与されるのと、コントローラーから住民やマスコミに扮してあえて意地の悪い電話をするなど、会場は常に緊張感と本番さながらの空気が漂う訓練となりました。





初めての訓練ということもあり、訓練後の報告の中には、「被害状況の把握や共有ができなかった」、あるいは「対応が後手になった」などの反省点が多く報告されました。

実はこの訓練がスムーズにいかないことは最初から想定済みで、むしろできるだけ混乱する状況を作り出すことが狙いでした。というのも、これまで各地で起こった被災地の災害対策本部の混乱を検証してつくられた訓練であり、「災害時の精神的プレッシャーや混乱を疑似体験する」ことが本当の目的であったからです。訓練ではプレイヤーはかなり混乱していましたので、訓練の目的は達成できたものと思っています。

そしてこの訓練の中で特に災害対応のポイントとして指導員から繰り返し言われたことは、「避難情報の発令」と「マスコミ対応」でした。

まず避難勧告の発令です。災害発生時に避難勧告などの避難情報を出さなかったことで、自治体の首長が批判を受ける報道がよくされています。おそらく皆さんもなぜ出さないのだろうと思われると思います。

災害によって違いもありますが、その災害がどう推移していくのか判断材料が不足しているなかで、避難情報の発令は、避難所の開設や避難者、誘導者など多くの人に影響が及ぶこと、また、空振りした場合の苦情などがあることも一つの要因と考えられます。

今では「避難情報の発令は空振りを恐れるな」と言われますが、当時、避難勧告の発令にあたっては重圧を感じるものであったと思います。幸いにも現場に居合わせることから波の様子や、集落に水が流れる状況が共有されたことにより、町長による迅速な避難勧告発令の決断と防災無線や広報車などによるすみやかな避難行動の呼びかけにつながったものと思っています。

また、この平成 19 年度は、入善町が県下に先駆けて災害時要援護者台帳とマップを作製していたことから、民生委員、社協関係者、職員が集まり、すみやかに 28 人の要援護者の自宅を回って避難の支援をすることができました。

逃げ遅れによる犠牲者がでなかったことがなによりだと思います。

今後、避難情報については、空振りもあることを含めて、住民の皆さんの理解を得られるよう努めることが大切だと考えています。

次にもう 1 点、マスコミ対応です。

新聞やテレビは、災害が発生している場所や被害の状況などは速く広く伝えることができますが、町にはできないことです。報道によって住民の皆さんをはじめ全国の多くの人に情報が伝わり、親戚や知人の安否確認や多くの温かい支援にもつながりました。

一方、混乱する災害対策本部が多数のマスコミ各社に個別に対応することは、非常に多くの時間を割かなければならず、場合によっては災害対応への影響や発信する情報のばらつきも懸念されます。高波災害では、前年の図上訓練の反省点にあった「時間を決めて共同記者会見を行う」とい方法をとりました。その結果、マスコミ各社との信頼関係も含めて、一定のルールの中で大きな混乱も無く、段階を追った情報発信へとつながったように思います。

以上は災害対策本部の一部に絞ってお話しをしましたが、日頃やっていないことはできないと言われるように、日頃の訓練や備えがいかに大切かということを感じたところです。

（福濱コーディネーター）

対策本部、行政の取り組みお疲れ様でした。どうもありがとうございました。

4人の語り部のお話を聞いて、いかがでしたでしょうか。川口さんは高波災害の後に入善町へ出向され復興にご尽力されたとのことですが、コメントをお願いします。

（川口コメンテーター）

今、住民代表、消防団代表、業者代表そして役場の方の4名の方からお話を聞いて、みんなで情報を共有して進められたおかげで初期対応がスムーズにいったのだなあと感じました。高波災害のあった当日は天気の良い日でした。私は公民館で地区青壮年部の娯楽大会をやっている中、昼のニュースで、芦崎がすごいことになってることを知りました。今日みたいに風もなく良い天気だったので、なぜ波が高いのか不思議だったのを覚えています。後日、ボランティア活動にも参加しましたが、それが縁だったのかもしれませんが、3月から8月末までの半年間、入善町に出向して災害復旧に携わりました。私からは、現場の復旧工事について話したいと思います。

災害で壊れた施設を復旧するには多くの費用が必要になります。どのように復旧して、一体いくらのお金がかかるのか。これを計算して国に申請して災害査定を受けました。これが最初の3ヶ月の仕事でした。5月までかかりました。海の中の施設はみんな壊れています。これをもとに戻さないといけない。そもそも同じものを作ってもまた高波が来ればまた被災する。どんな大ききでどんな形状で復旧するかを決める必要がありました。被災前は、離岸堤と離岸堤の間に「潜堤（せんてい）」という



平成20年2月25日 10:50

施設がありました。海水面の下にコンクリートブロックを並べて波を小さくする施設でした。しかし、潜堤ではまた高波が入ってくる恐れがありました。それならばすべて離岸堤にしておこうという方針で災害復旧に臨みました。しかし、被災前よりも大きなもので復旧するという方法は簡単に認められないものではありません。しかし、今日も来ておられますが、入善町職員の方が水産庁に出向き、「長さ500mの離岸堤を整備しなければ芦崎地区を守れない。」と熱意を込めて交渉してこられたものと思います。そうやって認められた工法で算出された金額が15億円ほどでした。こうやって必要な予算を確保するという仕事が終わりました。いよいよ工事執行です。

高波で飛ばされ見る影もなかった海岸護岸をどうやって復旧しようか。波が来れば護岸ブロックを外すことも並べることもできません。波が来ない高さまで、ダンプが通れる幅の工事用道路を海上に作らなければ工事ができません。しかし、そんなに多量の砂利をどこから持ってくるのか。

そこで、黒部川の河口の砂利を使わせて欲しいと、河川管理者である国交省に何度も何度も協議させてもらいました。このときお世話になったのが福濱事務所長でした。国交省には非常にスピーディーな事務処理の協力をいただきました。また、河川砂利使用に際し、砂利採取組合や野鳥の会の同意を得るよう指導がありました。これら関係者の方々の同意を得て何とか多量の砂利を確保することができました。

あと、感心したのは町的意思決定の早さでした。とにかく現場では波の高くなる12月までには工事を完成させなければなりません。5月に災害査定を終え、6月から工事発注して半年で完成させる。当時役場の人たちは、少ない人数でしたが、36件の工事を発注し、15億円の復旧事業を完成させました。また入善町議会も臨時に議会を開いて契約案件を審議していました。町を挙げての体制があったからこそ、この現場はわずか半年で完成したのだなあと感じました。完成した真っ白い離岸堤は雄々しく綺麗でした。今でも現場に行けば、海に横たわる白い竜が芦崎地区を守っているように見えます。当時携わった者として大変懐かしく思っております。



(福濱コーディネーター)

どうも、ありがとうございました。引き続きまして、現在の黒部河川事務所の古本所長お願いします。

(古本コメンテーター)

現在、下新川海岸保全事業を担当している古本です。今ほどの現場で対応された方々の話を聞いて、2点改めて勉強になりました。

1点目は寄り回り波の特性です。事前にわからないことが怖い。どういった形で情報を入手して、あるいは、どういった範囲で災害が起きているのかをいかに知るかということが難しさを知りました。

2点目は事前に訓練や準備を行っていたにも関わらず、実際に災害がきてしまうと予想していないことも色々起き、みなさんお忙しい中一致団結で対応に当たられたことに感銘を受けました。また（今後も万が一の時には）それができるように引き続き、普段から風通しよく（地元の方々と）コミュニケーションをとることで、迅速な対応ができるのではないかと改めて勉強させて頂きました。

2. これからの備え

(福濱コーディネーター)

過去の大事な経験は、これからの若い世代にも伝えていかなければならないと思います。語り部のみなさんから伺った経験から、災害の備えにつきまして、みんなで考えていきたいと思います。

これまで皆さんの発言の中で寄り回り波は、なんの前触れも無く急にやってくるという話がありましたが、私から少し話題提供をさせていただきます。

高波災害の被災状況がよくわかるこの写真を用いて違う話をさせていただきます。津波の場合、よくこんな写真が出てきます。たとえば東日本災害のときの写真です。しかし、高波災害の場合こんな写真は撮れません。この写真は読売新聞が撮影した空中写真です。空中写真が撮れているということは、たとえばヘリコプターが飛んでいるという状況です。風がないことも説明できます。また画像の鮮明さについてです。雨が降っていると鮮明な写真は撮れません。雨も降っていない、風もない、晴れた状態で高波が来襲したことの証拠になります。

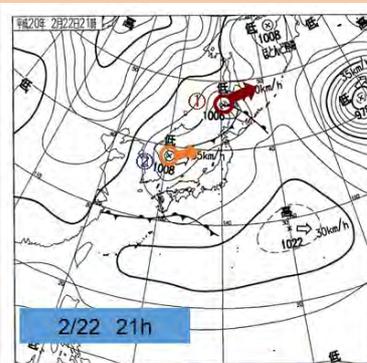


訪友場を越えて住宅に押し寄せる高波。富山県入善町で、読売新聞社提供

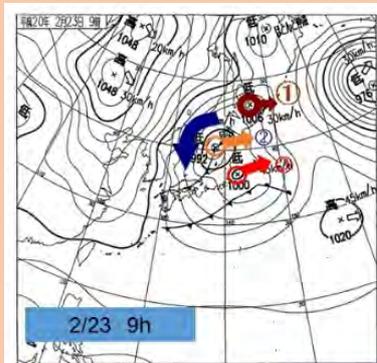
昭和45年にも高波がやってきております。当時も入善町や黒部市に大きな被害をもたらしました。当時被災された方や記憶がある方もいらっしゃるかと思います。50年前の記録では、波の記録が残っておらず寄り回り波の発生メカニズムが不明でした。気がついたら水浸しで土地がなくなっていたというような話を聞いたことがあります。10年前も残念ながら、寄り回り波を予測する技術がありませんでした。それでも精度の高い天気図も作成されており、日本海には波高計が整備されたところがあります。10年前、私も古本事務所長と同じ黒部河川事務所長の立場にいてデータ解析を行いました。一体、寄り回り波はなぜ発生するのだろうか。寄り回り波はどこから来るのか。高波が来ることを、事前にお知らせすることができるのだろうか、これがテーマでした。これから解説を進めていく前に、覚えてほしいことが3点あります。1点目、風が吹くとその方向に波が発生すること。2点目、気象は西から東に移動すること。3点目、風は等圧線に沿って吹くこと。

平成20年2月22日金曜日に、北海道の北に低気圧①、朝鮮半島東沖の②の2つがあります。金曜日時点では北陸は風も波も穏やかでした。

次は23日の9時の天気図です。高波が来るちょうど1日前になります。この低気圧②が発達しながら、北陸沖を通過します。



- 日本海北部の①と朝鮮半島東沖の②の2つの低気圧が東に移動
- ②の低気圧は、この段階では中心気圧が1000hPa程度

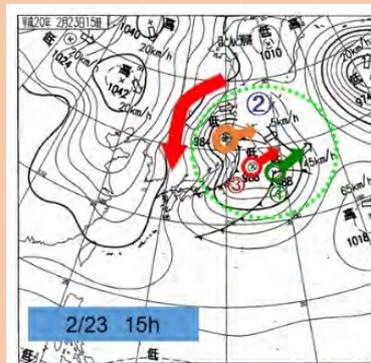


- ②の低気圧が発達
- 日本海北部で風波・うねりが発生

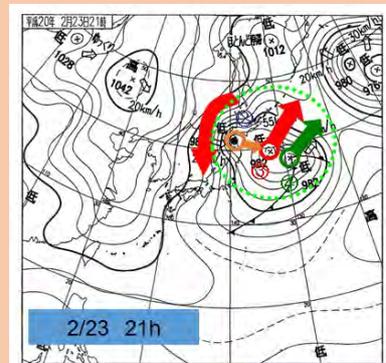
高波災害対策検討委員会資料より抜粋

日本海を低気圧が進むと寄り回り波が来ると思っている方は結構いらっしゃると思いますが、実は低気圧が日本海をそのまま進むことは毎年ある現象です。こんな大きな高波がくることはめったにありません。注意すべきは太平洋にある低気圧③です。寄り回り波の発生には太平洋側の低気圧が大きな役割を持っています。

次は23日の午後3時の天気図です。低気圧②がすでに離れていることがわかります。注目は低気圧③になります。これが発達してさらに低気圧④があります。結果等圧線があたかもひとつの大きな低気圧のようになり、風は低気圧の外側に吹いています。



- ④の低気圧が発生し、津軽海峡の②、三陸沖の③とともに停滞
- 日本海沿岸で風波・うねりが発達

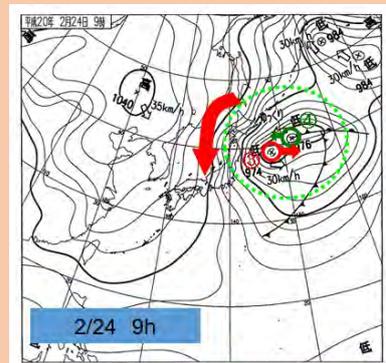


- 3つの低気圧とも980hPa程度まで気圧低下し、ほぼ同じ位置に停滞
- 日本海沿岸で風波・うねりが発達

高波災害対策検討委員会資料より抜粋

さらに次の天気図を見ると、23日前日の夜になります。日本海全体で、風は南西方向に吹いているということは、波も南西方向にやってくる。特に強い風が北海道で吹いていることがあります。

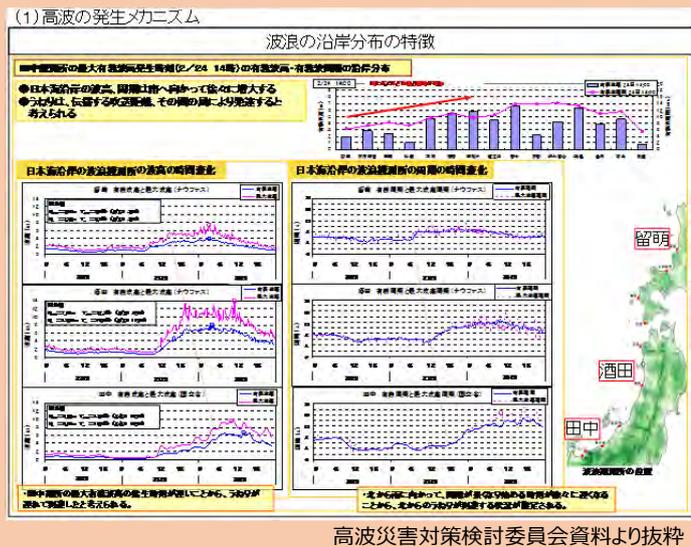
次が2月24日の朝です。北海道で発達した波が東北沖を通過します。風によってさらに発達します。これが富山湾まで高波が来る。富山ではほとんど風が吹いていません。



- ②の低気圧は消滅、③、④はさらに気圧を下げて、三陸沖に停滞
- 日本海沿岸で風波・うねりが発達

高波災害対策検討委員会資料より抜粋

北海道の留萌、東北の酒田の周期の変化を表したものです。気象条件で高波の予測ができます。国交省では、水防警報発令の根拠になるものになります。しかし自然現象であり、まだわからないことがたくさんあり、安心することはできません。



語り部のみなさん、災害の備えや防災につきまして、感じていることや会場のみなさんに伝えたいことを、お話をして頂ければと思います。それでは島倉さんからお願いします。

(島倉さん)

いろんな災害があるが、地元の地形や環境をよく把握して、まず自分の命を守る。時間があれば家族を守る。これからも行っていきたいと思います。また、会場の皆さんにも行って欲しいと思います。

(新酒さん)

高波被害への対応ですが、土嚢積みは国交省主催の訓練を黒部川で行ったことはあるが、波に対しての対応はこれでいいのか、もう少し工夫する必要があると思いながら当時訓練をしていました。

当時の副団長が生地の出身で、振興会長さんと二人でスロープを上がって波の様子を見に行かれた。私は土嚢を積んでいるときに、坂道を上って見に行かれている様子を見ていたが、作業に集中していたところ、わあと言う声が聞こえてなんだろうと思い視線を向けると、小走りでスロープを降りて来られた。その後波がどっと打ち寄せてきた。

危険を顧みずに行かれたと思うが、東北の震災の際にも、消防団は海岸を巡視していて、その時も何人かが海の様子を見に来られていた。確かその時、日本海側も津波注意報が出ていたと思うので、危険だから自宅に戻りなさいと声をかけました。私自身も半信半疑なところがありました。海の様子を見に来ている人にどこまで、私たちは立ち入ることができるのか。今後考えていきたいと思っております。



※⑧⑨の写真：(有)ミナトヤ造型提供

(大井さん)

先ほど大事なことをお話することを忘れていました。災害復旧の際に、のべ100社、作業員はのべ260名の方に作業をしていただきました。みなさんの復旧活動のおかげ、早急に復旧ができたと思います。

備えについてですが、下新川海岸は朝日町の境から黒部市まであります。50トンブロックの高さは4.65mあります。ビルで言うと2階半くらいの高さになります。50tというとピンとこないかもしれませんが、軽四のトラックを満車にして大体1tになるので、50台分になります。下新川海岸の離岸堤をずっと見てみると、あるところでは高さが高く50tのブロック、ある所は25tのブロックで高さが低い、あるところはまだ整備が進んでいない箇所もあります。想定外の災害はたくさんありますが、予報で多少の傾向は読めることができるようになってきており、さらに防ぐためには早急な整備が必要ではないかと考えております。



またもう一点はソフト面です。防災訓練のなかで、人口形態が変わり高齢化が進み、一人世帯が増えています。また要介護者や身障者などに対する施策が少し足りないのではないかと感じています。訓練のやり方も、昼や夜、日曜日・平日などに分け、状況に応じた訓練を実施して欲しいと思います。

(神子沢さん)

先ほどは、日頃の備えの大切さについて図上訓練のご紹介をしました。ここでは高波災害をふりかえり、感じたことをお話したいと思います。本日ここにおられる当時芦崎地区の区長会長であった島倉さんには地域の窓口として、昼夜を問わずご協力をいただきました。感謝とともに地域のリーダーの大切さを感じました。また復旧作業の現場では、大きな声でいらだつ被災者に対して、気持ちに寄り添いながらおだやかになだめられている建設業関係者の方を見て頭の下がる思いしました。また、多くのボランティアの参加は行政のできない部分への対応のみならず、それ以上に被災者の折れかけた心を支え、立ち上がる勇気を与えてくれる存在だと気づきました。高波災害では多くの皆さんにご協力をいただきながら、お礼を申し上げる場がありませんでしたので、本日このような機会を設けていただいた黒部河川事務所の皆様に心から感謝申し上げます。行政に携わる者として災害のみならずまちづくりのすべてにおいて、いかに互いの信頼関係が大切か、身をもって学ばせていただいた災害だったと思います。

(福濱コーディネーター)

引き続き川口さん宜しくお願いします。

(川口コメンテーター)

これからの備えということですが、高波災害に限らず災害は必ず起こります。それに備えるために心がけているのは、「知らせる努力、知る努力」ということです。役所は住民に対し、危険な場所などいろんなことを知らせる努力をしなければいけないし、住民の方は知る努力をしなければならないと思います。難場所や避難ルートなどいろいろなことに興味を持って知る努力をすれば人の被害が少なくなると思います。

(福濱コーディネーター)

どうもありがとうございます。それでは古本所長、まとめといったことも込めてコメントを宜しくお願いいたします。

(古本コメンテーター)

私たちの黒部河川事務所では下新川海岸の保全事業として昭和35年から侵食対策を進めております。特に平成20年の高波を受けてからは、高波対策も進めているところです。

こちらを見てもらいますと、実は去年の10月にも台風による非常に大きな高波が来ていました。その時は平成20年の時よりも高さとしては上回る高波でした。しかしながら離岸堤を全面に整備をしていたこと、堤防のかさ上げを行っていたため、去年の10月は浸水被害を免れました。安心して下さいと言いたいわけではなく、この冬や来年の冬に下新川でも観測史上最大の波が来ることは十分に考えられる。先ほどの川口さんのお話しにあったように、みなさんもいろんな形で情報入手をしていただき災害に備えていただきたいと思います。

黒部河川事務所のHPでも実際の状況をライブカメラで配信しています。現場を見に行くことは危ないので、できればこういった形で現場の状況を見て感じていただきたい。平成20年の高波災害を踏まえまして、下新川海岸では全国で初めて海岸の水防警報を出す取り組みを行っています。福濱さんからお話があった高波の予測をしまして、それを元に水防警報を発令しています。皆さんも情報を入力していただき、早めに避難することを考えていただければと思います。みなさんの防災意識を高めていくためのソフト対策を今後も引き続き進めて参りたいと思います。ハード・ソフト両方の側面から防災対策をしっかり行いたいと思いますので、今後ともよろしくお祈りいたします。

(福濱コーディネーター)

どうもありがとうございました。10年前を思い出しながら、4人の語り部の皆さんに加えて2人のコメンテーターの皆さんのお話をして頂きどうもありがとうございます。何度もお話に出ていますが50年前に高波が来ています、10年前にも高波が来ています。この高波を超える高波はもしかしたら今年の冬、来年の冬に来るかも知れません。そういったことを心に留めておきながら、今日のお話を家を持ち帰っていただき、ご家族の皆様ともお話をして頂ければと思います。

